

黒死牟の妹

鳳凰美田

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り、十二鬼月の一人。上弦の壺である黒死牟の妹が主人公の話です。

目次

最強の鬼の妹

1

最強の鬼の妹

目の前の焚き火から煙がくゆる。それを眺めながら煙管の吸口から煙を吸い、口から吐き出す。

「……ただの執着。いや、無いと落ち着かないだけか」

そう呟きながらも煙を吐き出すのは、女。

高級ではなくかといって安物でもない。それなりの品という評価が付く煙管を啜えながら、何処かの屋敷の縁側で女は煙を月へと向かって吐き出す。

「もはや意味の無い、この行為を終わらせるには至らない。全く貧弱になったもんだ」

「おい……」

「ん。おお、兄者」

屋敷の中から姿を現したのは長い黒髪を後ろで縛った男。その男を女は兄者と呼ぶ。これだけを見れば、何処かの裕福な家の跡取りと珍しく遊びまわっている妹に見えるだろう。だが違う。

女の足元には何かに食われた人の死骸があるし、女の口元は薄らと血で汚れている。男に至っては六つの眼が存在した。

「私のものを……勝手に漁るな……」

「わりいわりい、美味そうだったからついで」

二人は鬼。

始祖の鬼の血によって人ではなくなった。人を喰らい、その度に強くなる。人喰いの鬼。

「お前ももう……十二鬼月……私と同じ……上弦……」

「説教は無しにしてくれよ。何百年も耳にタコが出来るくらい聞いてんだからさ」

しかも始祖の鬼が選別した最精鋭である十二鬼月^{じゅうにきつき}。その中でも特に強い上位六人である上弦である。

「夜刀華……」

女の名前らしきものを言うと男はそれ以降は黙して女——夜刀華を見つめ続ける。始めはどこ吹く風だったが、次第に居心地が悪そうに煙を吐き出したかと思えば根負けしたのがあつと怒鳴る。

「わあつたよ！ 上弦としてちゃんと自分の飯は自分で確保する！ これでいいか！」

「分かればいい……」

「つたく。兄者は上弦の壺の癖に細か過ぎんだよ」

苛立ちをぶつけるかのように灰になった葉をたき火に放り込んだ夜刀華はそのまま

新しい葉を煙管へ詰め込む。薪を使って火をつけている夜刀華を見て男は用が無く
なったのかそのまま屋敷の奥へと姿を消す。夜刀華はそれを見送ると、食べ残しから剥
いだ服を焚き火にくべる。めらめらぱちぱちと燃える黒い服。

徐々に炭となる「滅」の字。それを眺めながら夜刀華は思う。

鬼になつて数百年。兄と共に人を喰らい、強くなり、全く興味のなかつた十二鬼月になつて早十数年。上弦にも興味がなかつたが、あの方からの勧め(命令)で壺の中に入つては出るを繰り返す気持ち悪い奴の首を斬つて上弦になり、あの方よりさらに血を貰つて数日。

(……腹が減つた)

飢餓感が増し、形振り構つてはいられなかつた。

(これだけで明日まで持つか……いや、もっと欲しいな)

服が完全に炭になる前に幾つか追加で持つて帰ることを決めた夜刀華は、食べ残しを持つて兄と同じくそのまま姿を消した。